

一人のねがいを みんなのねがいに

全障研全国委員長

越野和之



あるお母さんに教わったこと

私が大学院生の頃、就学問題を考える板橋連絡会という小さな会がありました。教職員組合の先生方、保育園の労働組合に集う保育士の方々の呼びかけで、公立および私立の保育園の先生方、小・中学校、特別支援学校の先生方、乳幼児健診に携わる保健師さんたちなど、障害のある子どもに関わるさまざまな職種の人たちと、地域の障害児の親の会に集う保護者の方々が集まってこられました。

会が発足して間もない頃、ある若いお母さんが、「私自身も学校の勉強はよくわからなかったし、楽しかった思い出はむしろ友だちとの関係や部活のことです。どうしても、障害のある子どもだけ、勉強についていけないからという理由で地域の学校に入ってもらえないのですか。わが子は、たとえ勉強がわからなくても、地域の学校、通常学級にいかせたいのです」と発言されました。「子どもにあった学校を選んでほしい」と思っただけで参加していた私は、どう応えようかと思え込んでしまったのですが、集まっておられた保育士さんや先生たちは、「そうですね。そういうこともこれから一緒に考えていきましょう」と、その

お母さんの発言を受けとめられました。二カ月に一回ほどの集まりだったと思

います。小学校や養護学校での教育の実際や、就学先を決めるための手続きなどについて、毎回少しずつ学びあいました。はじめのうちは緊張感もありましたが、参加された保護者には毎回必ず発言していただき、少しずつ打ち解けてきたある日、先のお母さんが、こんな発言をされました。

「障害のない子どもでも、たとえば目が悪ければ前の方の席にするなど、いろんな配慮がされますよね。そんなふうには、わが子にあった指導や支援を通常学級のなかでもらえるなら、それはぜひしてもらいたい。少しでも授業に参加したり勉強がわかるように助けてほしいとは思っています。でも、そう言うと『それができるのは障害児学級や養護学校ですよ』と言われるので、私は『勉強はわからなくてもいいです』と言わざるを得ないんです」。

それまで、「勉強はわからなくてもいい」という考え方をまず変えてもらわないと……と思っていた私は、自分の認識の浅薄さに気づきました。わが子にあった教育を、障害のない子どもたちと切り離されなかつたかたちで実現してほしい、というのが、このお母さんの本当のねがいであったのです。けれ

ども、それは到底実現しそうもない。そんな見通しのなかで、仕方なく「勉強はわからなくても……」と言わされてきたのではないか。そして、表明されたことばの背後にある本当のねがいは、何回も顔を合わせてお互いの思いを交流し、安心できる関係を築いてくるなかで、やっと話してもらえたのではないか……。

「ニーズ」ということばが流行りだした頃でした。「保護者のニーズは多様」などとも言われましたが、学校教育へのお母さんたちのねがいは、本当は「多様」、つまり、バラバラで一人ひとりちがうといったものではなくて、「多彩で多面的」（表明される「多様な」ニーズの一つ一つが、本当はどれも大切）ととらえるべきではないか、そんなことに気づいていく糸口をいただいた忘れがたい出来事です。

本当のねがいを見失わないために

「ひとりぼっちの障害者をなくそう」「ひとりぼっちのお母さん・お父さんをなくそう」「ひとりぼっちの障害児学級担任をなくそう」。私たちの全障研は、「ひとりぼっちをなくそう」ということを大切にしてきました。一人で困難に立ち向かおうとする時、困難な現実のある一面だけに目を奪わ

れて、本当のねがいを見失ったり、それを表明する勇気を奪われたりしがちです。けれども、本当のねがいは内奥に隠したままだけで、表明された「ニーズ」の実現をはかるだけでは、障害のある人とその家族の権利を守り、発達を保障していく道筋を見通すことはできません。

本当のねがいを見失われるのは、障害のある当事者や家族ばかりではありません。障害のある人たちの役に立ちたい、障害のある人たちの人間らしく豊かな生活の実現に自分の人生を重ねたいと願って、障害児教育や障害児者福祉などの仕事を志し



た人たちも、困難な現実の前に、「今の現実ではこうしかならない」「そういう現実をわかっていない保護者、利用者には困ったものだ」と思われかねません。「ひとりぼっち」は、このようにして一人ひとりの本当のねがいを奪い、手をつながなければならぬ人同士のあいだに対立を持ち込みます。これを許すと、現実の社会のうちにあつて解決が図られるべき問題が、仲間同士の問題に置き換えられてしまつて、手をつないで問題の解決に挑んでいく力まで奪われることになってしまいます。

だからこそ私たちは、立場や職種、年齢や経験のちがいを超えて、つどい、語り合うこと、ひとりぼっちをなくすことをなによりも大切にしたいと思います。「一人のねがいをみんなのねがいに」。本誌のタイトルにはこうした思いが込められています。人間らしく、まっとうに生きたいという私たち一人ひとりのねがいと、それがままならないという現実とのあいだで生じる悩みを語り合い、聴き合い、ねがいの実現を阻んでいる本質的な問題を明らかにしていきます。各地で開かれていた全障研のサークルや全国大会、研究会などが、そのためのかけがえのない場になっていくことを願ってやみません。